

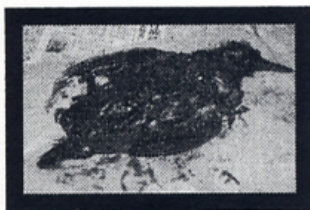


世界遺産・
知床に
忍び寄る



連鎖汚染の 恐怖

「油まみれの海鳥
5千羽漂着」は
始まりにすぎなかった!



日本の誇る世界遺産・知床に、
油まみれの海鳥の死骸が大量漂着!
だが、原因は今もナゾのまま。
しかも、すでに2次被害も発覚…。
北の大地に汚染の恐怖が迫る!

Crisis!



どこから来た？ 油はどこへ？ ナゾだらけの知床ミステリー

知床半島西岸に、おびただしい数の油まみれの海鳥が漂着している。2月27日の第一報から約1ヵ月半、雪解けとともに回収される死骸は増える一方で、その数はついに5千羽を超えた。しかし不思議なことに油そのものは海岸に漂着しておらず、どこで、どういった経緯で油が流出したのかもわかっていないのだ。

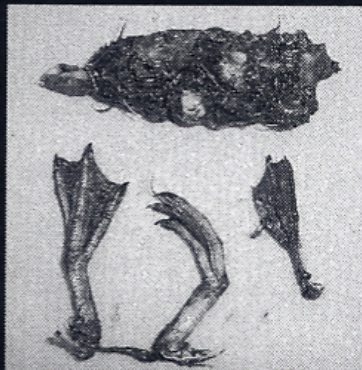
現時点で判明している事実は、海鳥に付着した油が船舶燃料などに使われる「C重油」ということだけ。当初はサハリン東北部の油田での油漏れ事故が原因とされたが、ここではC重油は作られていない。また、オホーツク海での座礁事故による油流出も確認されていない。世界遺産・知床が原因不明の油汚染危機にさらされているのだ。

「セイブ ジ アース!!」
本誌記者は、C.W.ニコル（もしくは立松和平でも可）から教わった自然愛を胸に、現地へ飛んだ。

ここは、知床半島西岸の付け根に位置する小さな町、斜里町。まずは海鳥の死体を確認するため、市街地を離れ海岸線を歩いてみた。

冷たい風が吹きつける寂しい海岸には無数の漂流物が転がっている。いくつかの漂流物を見てみると、黒い

3月29日に発見されたオオワシ(右)の胃の中からは油に汚染された海鳥(左)が発見された。発見現場の日の出海岸には「今年の2月は例年以上にオオワシが飛来していた」との証言もあり、さらなる被害者が出る可能性は極めて高い



知床には多くの貴重な野生動物が生息している。特にクマやキツネのような肉食動物が2次被害の標的になることは十分に考えられる。また、草食動物のエゾシカなども、連鎖汚染による3次、4次被害を被る危険性は否定できない



羽根が絡まっているものを発見した。死んだ「油濁鳥」だ。

漂流するうちに腐敗したのか、カモメやカラス、もしくは肉食動物に食い散らかされたのかはわからないが、まったく原形を留めていない。その後、立て続けに同様の死骸4体を発見した。

これまで回収された5千羽の死骸のうち98・9%がウミスズメ科の鳥だという。これはなにを意味するのか？ 知床博物館の中川元館長はこう説明する。

「ウミスズメ科は沖合に生息しており、海岸に生息するカモメ科の被害は0.7%ですから、油汚染の現場は沖合だと予測できます。ただ、この種はオホーツク海全域からベーリング海、北太平洋まで広く生息しており、生息地から事故現場を予測することは難しい」

それでは、どこで油に汚染されたかすれば、海鳥の死骸が海流に乗って知床まで流れてくるのか。北海道大学・低温科学研究所の大島慶一郎助教授は、

「この時期の漂流物は、東樺太海流の沿岸分枝に乗ってやってくる。間違っても千島列島やアラスカ方面から流れ着くことはない。おそらく南下する流水とともに流されてきたのではないかと分析する。もし樺太沖合で海鳥が油に汚染されれば、「2〜3ヵ月で知床西岸に漂着する」(大島氏)。

となると、流水が南下してくる以前になんらかの形で油が流出。そこに樺太中部を繁殖地とするウミスズメの群

れが突っ込んだとすれば、粘性の強いC重油によって身動きがとれない状態に陥り、そのまま東樺太海流に乗って知床に辿り着いたと推察することはできる。

犯人は、漁場を失った 海の荒くれ者？

以上のように、数々の状況証拠から、おおよその「事件現場」は推測できた。しかし、『誰が』『どうやって』油を流出させたのかは、現地専門家も現場職員も首をひねるばかりだ。

そんななか、科学評論家の齋藤守弘氏は「シベリア沿岸漁民犯人説」を唱える。

「昨年11月13日、中国吉林省の化学工場爆発で汚染物質が松花江に流れました。その下流のアムール川にも汚染物質が流入した危険性もあったため、ロシア当局は東シベリアの漁民に沿岸での漁業禁止を通告した。そこでこの冬、彼らはオホーツク海で漁業活動を行なうこととなったんです」

実は、ウミスズメ科の鳥には魚群を追って海面に群がる習性があり、漁師にとって絶好の漁場探しの目標になっている。逆に言えば、漁船の集中する場所にはウミスズメ科の鳥も群れをなしているということだ。

しかも、シベリア沿岸漁民は「2〜3ヵ月の長期にわたる母船式漁業を行なっている可能性が高い」(齋藤氏)と

いう。母船式漁業といえは昔の日本のカニ工船が有名だが、大型の母船1隻に小回りの利く小漁艇数隻を載せ、さらに独航船2〜3隻を従えて、船団をなして港に帰還せず漁をする方法だ。

「母船には大量の燃料が積まれており、小型の独航船は頻りに母船からエンジン燃料のC重油を給油している。その際の給油方法がメチャクチャ荒っぽく、給油ポンプから大量のC重油を船外に滴り落としているんです」(齋藤氏)

しかし、残念ながらこの説も完璧ではない。油濁問題に詳しい石油連盟の基盤整備・油濁対策部の西垣憲司氏は、シベリア漁民説の弱点をこう指摘する。

「一般的にC重油を使うのは貨物船などの大型の船。小さな漁船の場合、C重油を使うことは考えられません。まず、軽油やA重油を使いますからね」
やはりシベリア漁民に原因を求めるのにはムリがあるのか？ だが、齋藤氏は臆することなくこう力説する。

「今回の措置は中国の工場爆発による突発的なものですから、オホーツク海で漁業をするために急遽、船を仕立てているのは間違いない。当局非公認の

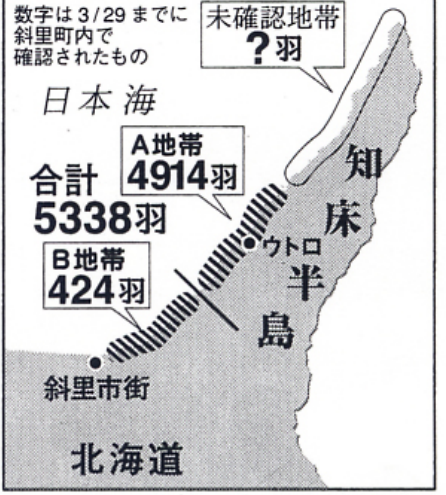


油濁鳥が知床西岸に漂着していることから、樺太の東沖で油が流出した可能性が高い(海流図:大島ほか・2002年)。また、積雪により閉鎖されている知床半島先端部の捜索はもう少し先になるが、下図の回収分布を見ると、先端部にはさらに多くの油濁鳥が漂着していると推測できる



海鳥の被害数からすれば国内最悪の油汚染事故であるにもかかわらず、海岸線にはなぜか油がまったく漂着していない。そのせいか報道機関の反応は非常に鈍く、政府も原因が絞り切れないために強いアクションを起こせずにいる

油汚染鳥類回収分布図



「閣の中古船などを使っている可能性は極めて高いんです。当然、当局の目の届かないところでやっているので、安いC重油を使っても不思議はない」
この説に、もちろん確証はない。しかし、一部の乱暴な漁民が故意か過失か、重油を流出させてしまった可能性も決して否定できないのである。

「連鎖汚染」はすでに始まっている！

また、油が見つかっていないミステリーも、こう仮説を立てることは可能だ。「油が海の流れにより分散し、それが時間をかけて分解していく可能性はある」(前出の石油連盟・西垣氏)の、齋藤氏の指摘するような燃料給油に伴う分散した小規模な流出だとすれば、「冬のオホーツク海でもっとも強い流れ」(前出・大島助教授)の東樺太海流に採まれば油は自然と分散し、分解されてしかるべきだと。

最後に、鳥の回収作業を指揮している斜里町役場を訪れた。この奇怪な事態を現場はどうとらえているのか？
「最初の発見から1ヵ月以上経過していますが、いまだに原因はまったく把握できておりません。我々が現場でできることは、2次被害が拡大しないよう回収作業をすることだけです」(環境保全課・増田泰氏)

しかし、現実には2次被害を完全に防ぐことは難しい。記者は油濁鳥をおいしそうにすればむカモメの姿を現地で何度も目撃しているのだ。
科学評論家の大宮信光氏は語る。

「今後、雪が完全に解ければさらなる油濁鳥が大量に見つかる可能性は高い。数万羽どころか数百万羽もの海鳥の死骸が発見されてもおかしくはないでしょう。それでさえ大破局の兆候にすぎないのかもしれないのですが」
先月29日に斜里町・日の出の海岸で希少種のオオワシの死骸が発見された。環境省釧路自然環境事務所が解剖した結果、胃の中から油に汚染された海鳥の一部が見つかり、死因も油汚染による臓器不全と判明。

また、海鳥の死骸付近に大量のキツネのフンが落ちていたとの情報もある。2次被害の脅威はすでに陸上のは乳類にまで進行しているのだろうか？
忍び寄る「連鎖汚染」の恐怖。知床の大自然が、いまだかつてない危機に瀕していることだけは間違いない。